サイエンティフィック・システム研究会　　2014 年 10 月 30 日
合同分科会 2014 年度会合 資料

「コピペ」問題の本質とコピペルナー

杉光 一成

金沢工業大学 教授

[キーワード]
コピペ, 本質, 剽窃, コピペルナー, 対策

1. はじめに

世界大学ランキングというものがあり、日本は 2014 年に大幅に後退したと報道されている(1)。筆者は、コピペ問題を現状のまま放置すれば、今後はますます後退することを危惧している。

今から 6 年前になる 2008 年 5 月 25 日、朝日新聞の朝刊に「コピペしたリポート、ばれちゃうぞ 検出ソフト開発」という記事が掲載された。この記事の中で、筆者はこの「検出ソフト」の開発者として紹介され、その後は様々なメディアにおいて「コピペ検出ソフト」とは何か、そしてその背後になる「コピペ問題」について発言するようになった。

当時の記事の反響は大きく、特にインターネット上の掲示板には恐るべき勢いでこの記事に関する意見が書き込まれた。概観する限り 9 割 5 分程度は肯定的意見だったが、一部には「コピペはコンピュータの便利な機能なのにそれを否定するのはおかしい。」等の明らかに的外れな意見も多かった。このような咬み合わない反論が生じる原因は何かを検討してみたところ、それは「コピペ」についてきちんとした定義がない状態で議論していることにあると気がついた。実は「コピペ」問題について論じる際に最も重要なことは「コピペ」という言葉をきちんと定義した上で議論することである。

そこで本報告では、「コピペ」とはコンピュータのコピー＆ペースト機能を用い、他人の文章等を写して自分の文章等と詐称する行為と定義する。

2.「コピペルナー」開発に至った経緯

開発のきっかけは、2007 年に大学院でレポート課題を出し、提出された院生のレポートを読んでいた時に遡る。ある学生のレポートを読んで、「なかなか斬新な視点のアイデアが書いてあるな」という印象を持ったが、その次の次のレポートを読んで、2つのレポートの大半が同じ内容であることに気がついた。そこで、インターネットで調べてみたところ、あるブログの内容がほとんどそのままコピペされていたことが分かった。しかし、それ以上に驚いたのは、小学生・中学生の感想文の宿題を支援するサイトの存在である。例えば、夏目漱石の「坊ちゃん」の「感想文」の例が掲載されており、更には、中学校 2 年生向けとか、小学校 6 年生向けなどにも分類され、「自己責任で自由にお使いください。夏休みを有意義に過ごしましょう」といった注意書きが書かれていたのである。このとき、このようなコピペを繰り返して大人になり、大学のレポートもコピペで済まして社会に出て行くことになった人達はその後本当に社会で役立つ人間になれるのだろうかという疑問と、それ以上にそういう人達ばかりが社会に出るようになったら日本はどうなってしまうのか、という空恐ろしさを感じた。

このような経験から、そもそもレポートや感想文の文章を抜き出して検索エンジンにかけるという「作業」であれば、コンピュータで十分処理できる話ではないかと考え、既にそういう商品（ソフトウェア）あるいはサービスが世の中に存在するはずであるからそれを購入しようと探したところ、驚くべきことに存在していなかった。そこで、自分で開発しようと考えたのが開発に向かった動機である。

3.　コピペの現状

このような「コピペ」の日本における現状は実際どうなっているのだろうか。データを求めたが、日本の大学等における「コピペ」の実態についてきちんと全国的な調査をした形跡が見当たらなかった。

そこで、2010 年、日本の複数の大学の学生 600 名（回答数 82 名）を対象にコピペの実態調査アンケートを行った。その結果、35%の学生がコピペをしたことがあり、コピペをしてもその約 4 分の 3 が発覚されないままになっている等の現状が判明した。また、コピペをした学生のうち 8 割を超える者が「コピペは良くないこと」と認識しており、多くの学生が悪いことと認識しつつそれでもなお「コピペ」を行っていることも示されていた(2)。

35%という数字をどう評価するかであるが、コピペというのは試験で言えばカンニングに相当する行為であることを考えれば、3 分の 1 以上の学生がカンニングをしている状況と同じといえる。そう考えれば、この高い数字はやはり異常と言って良いだろう。

4.　コピペの生み出す弊害

ここで、コピペの生み出す弊害は何かを整理しておきたい。実はコピペをした学生、教員、そしてコピペをしなかった学生という学校関係者のほぼ全体にとって弊害がある。つまり、コピペをしたレポート（学位論文も含む）を提出した学生からすると、レポート課題に対応して、自分で調べ、調べた事実やデータから自分で考え、その自分の考えを表現する、という既存の座学を通じては中々得ることができない貴重な機会、ある意味で考える機会を失うという意味での損失がある。

もちろん、コピペのレポートというのは、自分で考えていない部分について自分で考えたと称して提出するのであるから、教員を欺く行為に相当する点でも問題である。いわばカンニングに相当する行為であるからこれを見逃すのは試験でカンニングを見過ごすことと同様の問題となる。

次に、そのようなレポートの提出を受ける教員からすれば、コピペが含まれているかどうかをチェックするという後ろ向きの作業をやらざるをえない、余計な時間がかかるという点がある。

最後に、コピペのレポートが見過ごされて評価されてしまうと、真面目にレポートを作成して提出した学生にとって非常に不公平なことになる。コピペ問題を放置すると正直者ほど馬鹿を見るという結果を生じさせかねず、教員のみならず学校に対する信頼が低下するという弊害を生み出す可能性がある。

5. 対策　～おわりにかえて

「研究不正」という研究者の問題については最近になって国の取り組みが始まったようであるものの、それ以前の問題ともいえる学生のコピペの問題を直視していない関係当局へは警鐘をしたい。情報倫理、著作権教育といった教育の問題として取り組む必要があるのは当然であるが、悪いことと認識しつつ行っているのであるから、それだけでは解決できないのが現実である。例えば、窃盗犯に対して「物を盗むことは悪いことだ。」という教育をするとどれほどの効果があるだろうか。

教育とコピペを見過ごさないための教員側の監視（コピペルナーもその一つ）はセットで重要となる。そして抑止効果という点を考えれば、コピペが発覚した際の厳格な処分も重要である。

筆者の知る限り、例えば米国ではコピペのレポートが発覚した場合、非常に厳しい処分があり、通常は退学処分とのことである。その意味では、日本の現状は取締も処分も極めて緩い。その意味で日本の現状はおそらく世界でも珍しい「コピペの楽園」である。このままではグローバルの世界から取り残されることになるだろう。

以上

[参考]

(1) 杉光一成(2010)、『大学等における「コピペ」問題の現状と対策及びその課題』、コンピュータ利用教育学会・2010ＰＣカンファランス（http://gakkai.univcoop.or.jp/pcc/paper/2010/pdf/58.pdf）

(2) http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2014-15/world-ranking